

田村 剛による実用主義庭園から庭園改善、国民庭園への変遷 —大正・昭和戦中期の造園界にみるモダニズムとナショナリズム—

市 川 秀 和*

DR.T.TAMURA'S FUNCTIONALISM – IMPROVEMENT – NATIONALISM – Japanese Landscape's Modernism and Nationalism in Taisho and early Showa –

Hidekazu Ichikawa

In this paper, I tried to make clear Japanese Landscape's Modernism and Nationalism in Taisho and early Showa. The question of european modern design's adoptions also cropped up in Taisho and early Showa period critiques of the conventional Japanese style house-garden, and in statements of the Housing Improvement (Jutaku Kaizen Undo). However by the late Taisho period, a few example of middle class residences with modern design style garden appeared in a model house shown at an exhibition by the Life Improvement Union (Seikatsu Kaizen Domeikai) and among other designs presented in magazines.

In the european style homes with modern garden the living room had a focal position, both in terms of family life, and on the architectural ground plan. This study's objects are Dr.T.Tamura's early books and his activity in the Life Improvement Union. In conclusion, Dr.Tamura's texts and actions in the history of Japanese modern Landscape and Architecture includes european modern design's thought as secession.

1. はじめに —日本造園の近代：本研究の目的と射程—

これまでの近代日本造園史研究については、多様な視座からの研究アプローチが着実に遂行されてきたわけであるが、それらの多くの成果は、文献史料・遺跡・実物等の研究資料に比較的恵まれた都市公園や自然公園、そして伝統的な庭園様式や上流階級層の庭園、さらに造園原論や風景論等が中心であったと考えられる。かかる従来の考察対象は言うなれば、政府高官や貴族、知識人などの富裕層による<上からの視座>であったのに対して、庶民層による<下からの視座>つまり一般国民のための造園（庭園）文化は殆ど注目されて来なかったのではなかろうか。

そこで本研究は、従来の研究動向を踏まえた上でこれまで殆ど大きく注目されることのなかった、大正・昭和戦中期の一般住宅庭園を研究対象として取り上げるものである。

日本造園界の近代化推進は、明治期において都市公園の新設や富裕層の住宅庭園等から進められたものの、大正期に入ると中流層から庶民層に到る一般国民の住宅庭園にまで広がり始めた。そのうえ大正期とは、明治以来の西欧文明に追従する「欧化主義」の時勢から、新たな近代都市文化が開花する「モダニズム(近代主義)」の時代でもあり、そうしたモダンな文化動向が一般国民の住宅庭園に反映され始めた。さらに昭和になると、混迷化した世界経済を背景に太平洋戦争へ向かって、軍国主義や国粹主義などが日増しに興隆する「ナショナリズム(国家主義)」の時代のただ中におかれた日本造園界は、戦時下に合った言動を余儀なくされたのである。

* 建設工学科 建築学専攻

従って本研究の目的は、大正・昭和戦中期における一般国民の住宅庭園を通して、日本造園界にみるモダニズムからナショナリズムへの思潮変遷を究明することに他ならない。具体的には、日本造園界の重鎮の一人であった田村剛(1890～1979)に注目して、その著書の『造園概論』(1918)と『実用主義の庭園』(1919)からモダニズム的な萌芽や機能主義的なモダンデザイン思考を読み取り、続いて一般国民に向けて実践的に展開した「庭園改善運動」を詳しく検証する。さらにこのような田村剛による一連の機能主義的な庭園デザインが、昭和初期の激化する戦局を背景にして「国民庭園」の提唱へと変遷する事態を追跡するものである。¹⁾

2. 大正期・造園界のモダニズム宣言と機能主義デザイン

2-1) モダニズムの芽生え：『造園概論』

大正7年(1918)出版の田村剛著『造園概論』には、明治期・洋風造園を代表する「日比谷公園」の設計に見られた「欧化主義」とは全く異なった新たな問題意識が表明されていたと思われる。それを同書「第六章 時代思潮と庭園」から引用して確認したい。

現代は混乱時代である。過渡の時代である。現代を代表するに足る思想がないと同様に、現代を代表する造園はない。現代は将来の造園を醸成せんとする努力の時代である。現代の造園家は欲する所の主義に従って、無二無三に努力奮闘しなければならぬ。それが難ては将来の造園を大成する所以である。²⁾

洋風と和風の並置式・折衷式の二重生活スタイルが広まった明治以来の欧化主義による造園界を「混乱時代」「過渡の時代」と批判する田村は、「現代の造園家」にとって「将来の造園を大成する」ことが急務であると考え、そのためには欧米における「図案や建築の新傾向たるセセッション式」³⁾と共鳴した新たな表現様式こそ、今後の庭園デザインに最も相応しいと洞察していたようなのである。このセセッション式(分離派様式)とは、西欧近代芸術の初期モダニズムであることから、田村の思考のなかに「モダニズムの芽生え」が読み取れるのではないだろうか。

2-2) モダニズムの宣言書＝機能主義デザインの表明：『実用主義の庭園』

このようにモダニズムの萌芽的な言説を含んだ著書『造園概論』に続いて、翌大正8年(1919)に出版された同じく田村剛の『実用主義の庭園』は、さらなるモダニズムへの明確な進展が見受けられるのである。そこでこの著書の「序」から引用して考察を進めたい。

茲に主義として実用を標榜し、形式としては最も原始的な簡単な直線や直角や円等をのみ採用し、材料としては果樹や蔬菜や花卉や芝生や緑陰樹等をのみ使用した、小面積の庭園を思い着いて、従来我国に於ける理想的浪漫的な風景式庭園に対して、全然反対の態度に出て、現実と実用との鮮明な革新の旗を翻したのが、この「実用主義の庭園」なのである。⁴⁾

まず「最も原始的で簡単な直線や直角や円等をのみ採用」という箇所注目すると、ここからモダニズム芸術一般に共通するデザイン思考、つまり単純な幾何学的構成を尊重する「機能主義デザイン」がイメージされてくる。また同書では、この具体的な最新事例として欧米の現代庭園11作品(その一部：図-2～6)が大きく紹介されている。こうして海外の機能主義デザインを積極的に受容した田村は、一般住宅の「理想庭園」(図-1)を自ら設計提案して、「国民芸術の一つとして」⁵⁾普及させたいと考えていたのである。要するに著書名「実用主義」の意味する内容とは、同時代の欧米における「機能主義 Functionalism」の影響に拠っていると言える。

このように田村剛による一般国民に向けた実用主義庭園とは、欧米の現代庭園とその機能主義デザインを模範として誕生したのであり、ここに日本造園界における機能主義デザインへの表明、さらにモダニズムへの本格的な躍動開始を確認することが出来るのではないだろうか。



田村 剛 (1890 ~ 1979)

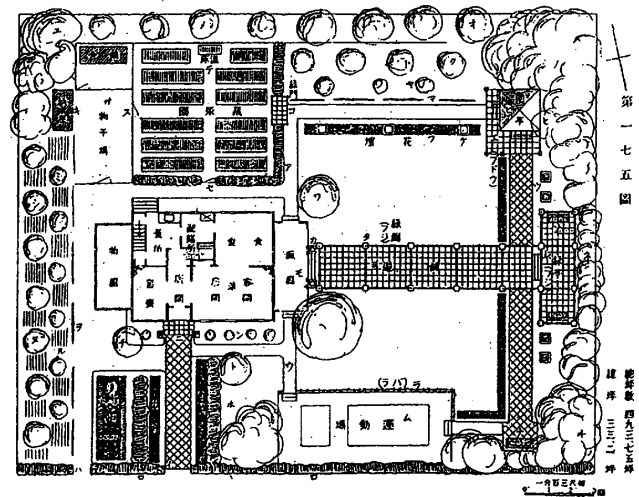


図-1) 田村剛設計「郊外住宅の理想庭園」

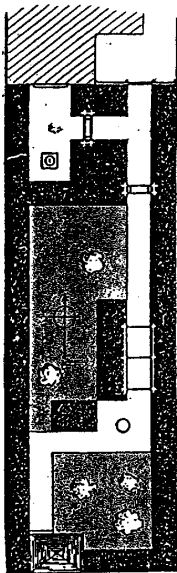


図-2) イギリス・ロージャースの設計案
(W.S.Rogers)

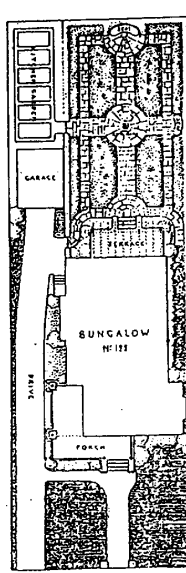
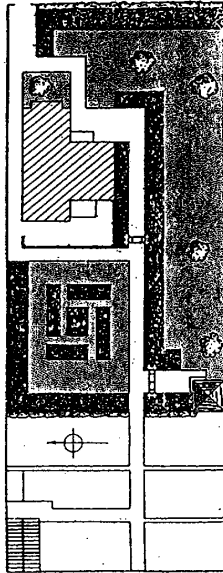


図-4) アメリカ・マーマンの設計案
(Eugene O. Murmann)

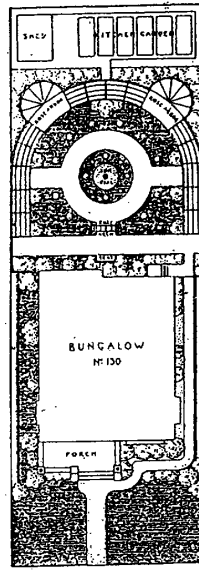


図-5)

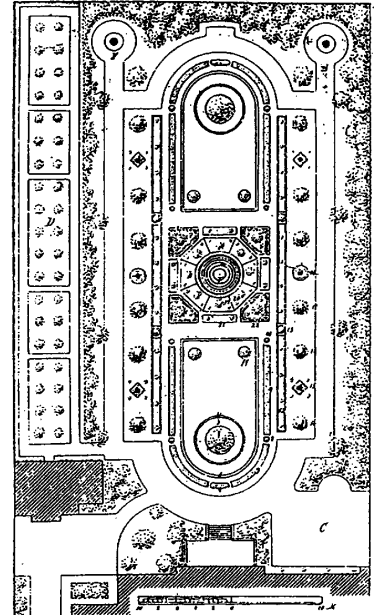


図-6) ドイツ・ハンペルの設計案
(Carl Hampel)

続いて「材料としては果樹や蔬菜や花卉や芝生や緑陰樹等のみ使用した、小面積の庭園」という言説からは、実用主義庭園における具体的な機能主義イメージが読み取れる。つまり一般国民の家庭生活にとって便利な果樹・蔬菜とともに、家族の遊戯や談笑に満たされた「戸外室」⁶⁾としての庭園空間が考案されており、これは芸術的な鑑賞庭園と評される伝統庭園とは全く性格を異にするのである。つまり、田村にとって新時代に相応しい機能主義的なデザインによる庭園様式＝実用主義庭園を我が国で初めて誕生させるためには、歴史や伝統を敢えて拒絶する強硬な態度が敢えて必要であったと考えられる。そこで、こうした当時の田村の立場を踏まえた上で、次の「従来我国に於ける理想的浪漫的な風景式庭園に対して、全然反対の態度に出て、現実と実用との鮮明な革新の旗を翻した」という『実用主義の庭園』出版目的を宣言する内容を読み解くとき、これを如何なる歴史的な解釈あるいは評価が可能なのであろうか。

因みに大正9年に「我々は起つ。過去建築圈より分離し、総ての建築を真に意義あらしめる新建築圈を創造せんがために。」と宣言して活動を開始した「分離派建築会」とは、伝統デザインと決別した西欧近代のセセッション(分離派)という総合芸術運動を理想的なメージとしていたのであり、日本近代建築史における「モダンデザインの原始点」として現在高く評価されている。そこで全く同時期の分離派建築会に対する今日的評価と同様な視座から、田村剛による『実用主義の庭園』の出版目的を評価することが許されるのであれば、これこそ近代日本造園史における「モダニズム宣言」の意義を持つと考えて良いのではないだろうか。

3. 実用主義庭園の提唱から庭園改善運動の実践へ

3-1) 文化住宅の普及と生活改善同盟会の発足

明治期に上流階級を中心に広まった近代的な生活文化が、大正期になると中流・庶民層の一般国民にまで普及し始めた。この大正期に到って広まった近代的な生活とは、明治以来の和洋並置・折衷式による二重生活とは全く異なって、新しい理想的な国民生活としての「文化住宅」⁸⁾を指していた。

この文化住宅の普及を推進した中核団体の一つが、大正9年1月発足の文部省外郭団体「生活改善同盟会」⁹⁾であり、「衣食住」に関する近代的合理化の具体的指針を作成し、一般国民に広く普及・定着させることを目的としていた。この同盟会には各専門別に小委員会が設置されており、住に関する「住宅改善調査委員会(会長:佐野利器・東大教授)」では、右の表-1) 六代綱領を即時公表¹⁰⁾したのである。

この六代綱領の中の第4項「庭園」に見られる改善指針は、当委員会の田村剛による発案に基づいていた。つまり第4項は、前年出版の著書『実用主義の庭園』がほぼ受け継がれて反映したものであろう。

従って、先の著書『実用主義の庭園』等において造園界のモダニズムを提唱し始めていた田村剛は、この生活改善同盟会への参加を機に、実用主義庭園の理念を実践化するための有力な活路を確実に見出すに到ったと考えられるわけである。

3-2) 実用主義庭園＝庭園改善の実現に向けて

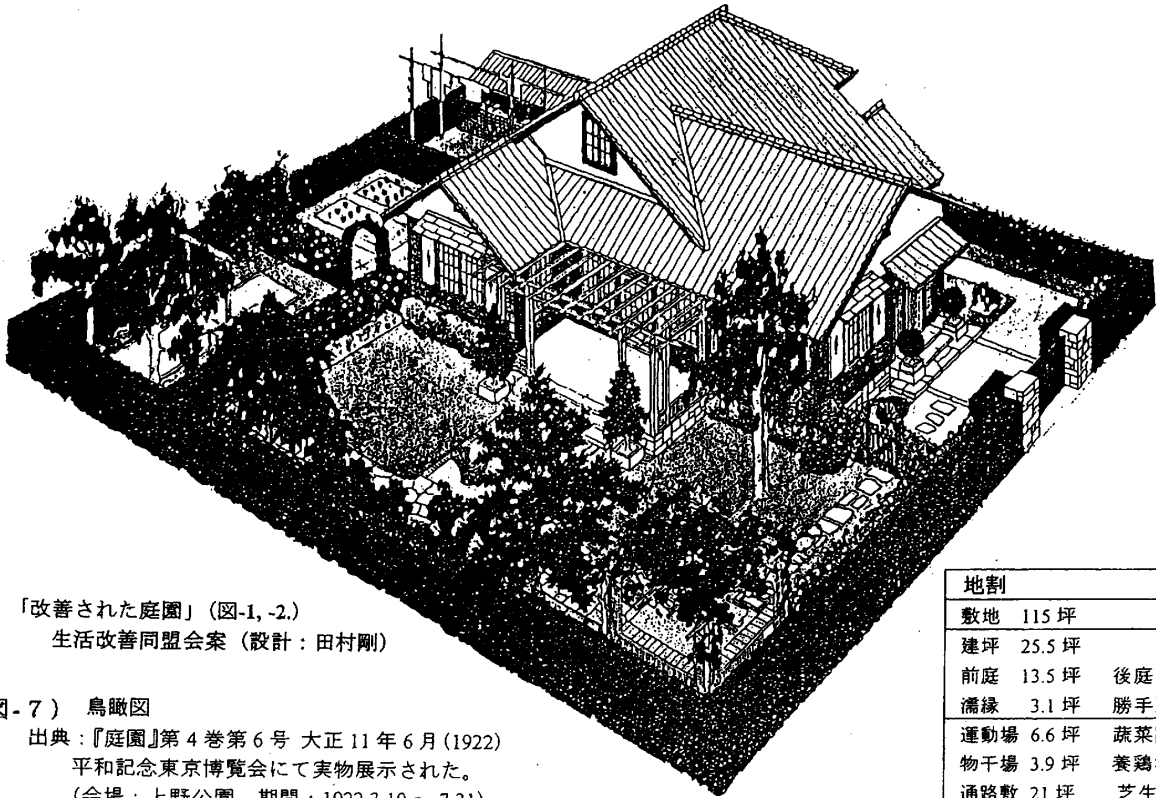
生活改善同盟会・住宅改善調査委員会はさらに活動を展開し、大正11年3月開催の「平和記念東京博覧会」にて先の六代綱領に基づくモデルを实物展示する企画を構想した。そこで六代綱領が各専門分野別委員によってそれぞれ詳細に検討され、田村剛による庭園改善も上の表-2のように詳細な内容で纏められた¹¹⁾。そして当博覧会期間中に上野公園を会場として展示された实物モデルの図面(鳥瞰図・平面図)が、次頁の図-7,8なのである。

表-1 「住宅改善の方針」六代綱領(大正9年5月決定)

1. 本邦将来の住宅は漸次椅子式に改む可し。
2. 住宅の間取り設備は在来の接客本位を家族本位に改む可し。
3. 住宅の構造及び設備は虚飾を避け、衛生及び災害防止等の実用に重きを置く可し。
4. 庭園は在来の観賞本位に偏せず、保健防災等の実用に重きを置く可し。
5. 家具は簡単堅牢を旨とし、住宅の改善に準ず可し。
6. 大都市にありては地域の状況により、共同住宅(アパートメント)及び田園都市の設備を奨励す可し。

表-2 「庭園改善(＝実用主義庭園)」の詳細内容

1. 実用主義庭園の性格(庭園観念の改造)
 - ①主人・接客本位から家族本位へ
 - ②観賞本位から実用本位へ
 - ③特権階級から一般国民へ
 - ④庭園と住宅の機能的結合
2. 実用主義庭園の機能・構成・設計・管理(具体的方法)
 - ①機能
 1. 実生活の利便性(玄関・勝手・物干・物置)
 2. 空地の有効性(採光・通風・防災・衛生)
 3. 戸外の居室性(快適な室内の延長)
 4. 経済性(蔬菜・果樹・家畜)
 5. 景観性(街路装飾への配慮)
 - ②構成
 1. 地割(住宅の室内空間と結合した有効利用)
 2. 規模(建坪の3倍以上)
 3. 芝生(南面)と植込(日照調整)
 4. 運動遊具(砂場・滑台・ブランコ)
 5. 附属建築・家具(涼亭・壁泉・ベンチ)
 6. 通路(前庭と後庭の連続性)
 - ③設計
 1. 家族構成とその実生活の尊重
 - ④管理
 1. 家族全員の主体的参加



「改善された庭園」(図-1, -2.)
生活改善同盟会案 (設計: 田村剛)

地割			
敷地	115 坪		
建坪	25.5 坪		
前庭	13.5 坪	後庭	48.2 坪
溝縁	3.1 坪	勝手廻	24.7 坪
運動場	6.6 坪	蔬菜園	6.2 坪
物干場	3.9 坪	養鶏場	3.4 坪
通路敷	21 坪	芝生	17 坪

図-7) 鳥瞰図
出典: 『庭園』第4巻第6号 大正11年6月(1922)
平和記念東京博覧会にて実物展示された。
(会場: 上野公園、期間: 1922.3.10 ~ 7.31)

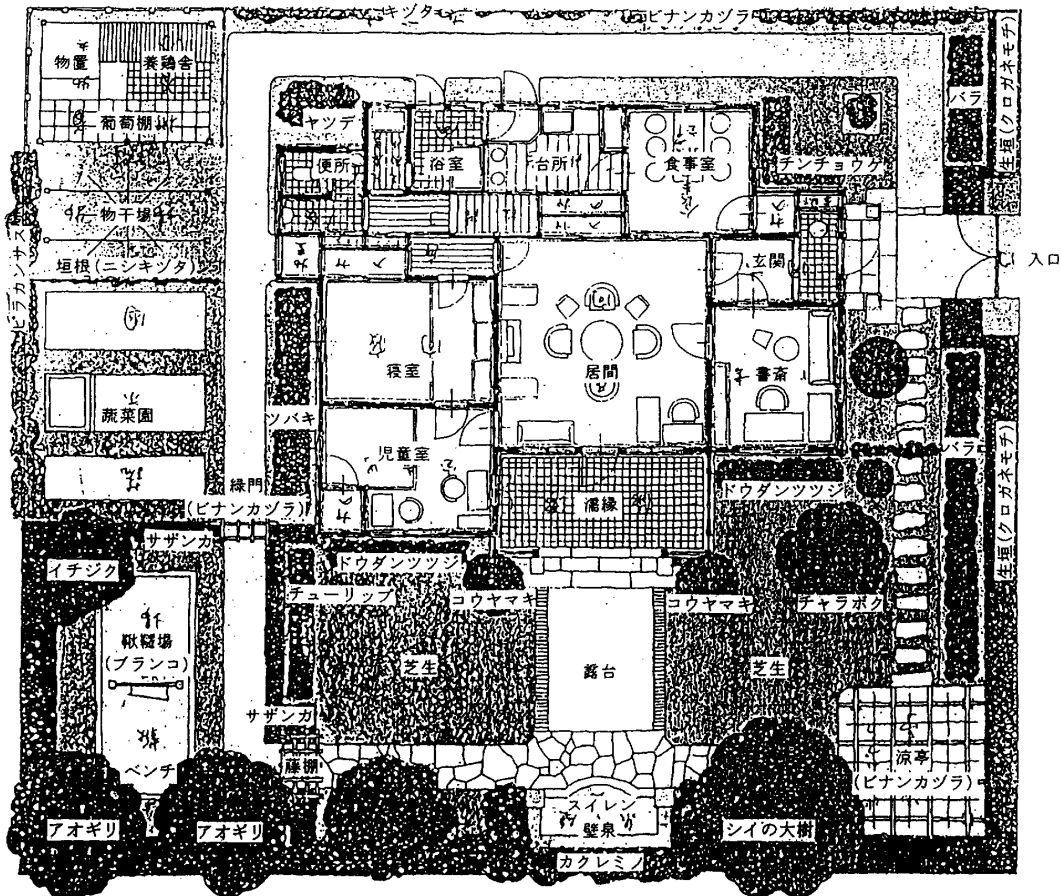


図-8) 平面図兼配置図 出典: 『庭園』第5巻第1号(特集: 庭園改善号) 大正12年1月(1923)
なお庭園に書き込まれた植物名等は、解説に従って書き加えた。

0 1 2 5 m

そこで表-2)の庭園改善に関する詳細内容から見ていくと、理想的な実用主義庭園を設計するに当たっての<性格規定：理念>と<具体的方法：実践>が総合的に取り纏められている。

まず<性格規定：理念>については、「一般国民」を対象として「家族本位」「実用本位」「庭園と住宅の機能的結合」から特徴づけられており、これは大正期における従来の封建的特権的な家族制度（接客本位）や伝統的な庭園様式（観賞本位）に対する歴史批判を根底として、さらに田村自身の機能主義デザインによるモダニズム思潮も濃厚に反映していると見て良いであろう。

また<具体的方法：実践>については、実際の設計基準が機能・構成・設計・管理の全体にわたって実に詳細に提示されており、図面と対照するといっそう理解が深まるであろう。なお、この基準に従って設計された実物平面図の庭園部分（図-8）には、田村による解説に基づいて植物名や付属物、面積表（坪）を書き加えた。

次に図面を詳しく見てみると、まず田村剛の機能主義デザインによる実用主義庭園は、居間中心型プランによる文化住宅の間取り一つ一つと機能的に結合した全体計画となっていることが明らかである。住宅の中心に大きく位置づけられた家族のための居間が南側外部に向かって大きく開かれ、その延長に濡縁・露台を介して庭園空間が最も広がっている。また児童室に隣接したチューリップ花壇やブランコ、さらに北側の台所・浴室・便所等近くには物置や物干場、蔬菜園等が配置されている。このように住宅内部の室内機能と結合した多様な機能性を持つ庭園空間構成は、直線による苑路によって一つに統合されているのである。さらに家族本位による庭園改善を尊重する設計態度によって、家族の主体的参加による管理維持までもが盛り込まれている。

以上のように、田村剛によって考案され実現化された実用主義庭園＝庭園改善は、上流階級における観賞本位の庭園様式と全く異なって、一般国民を対象にして機能性・快適性・経済性を最も考慮して創造された、新しい庭園デザインなのである。またこの実用主義庭園にみる表現方法は、直線分割構成によって機能主義的にデザインされ、芸術性（美）と機能性（用）の造形統合が目指されており、モダニズム芸術が強く影響していると思われなければならないだろう。

こうして生活改善同盟会を通して、田村剛によって実現化に向かった実用主義庭園＝庭園改善と機能主義デザインの波及は、当時の日本庭園協会¹²⁾の機関誌『庭園』（大正12年1月）において特集<庭園改善号>となって大きく取り上げられるなど、田村の意図した造園界のモダニズム思潮はさまざまな反響を生み出して、<運動体>として大きく展開する可能性を秘めていたと考えられるのであるが、その一方で完全否定的な批判も投げつけられたのである。

4. 上原敬二による実用主義庭園の批判

以上のように田村剛は、まず著作を通して欧米の最新事例に基づいた機能主義デザインとその実用主義庭園を紹介して、大正期・造園界におけるモダニズムを提唱し始め、さらに生活改善同盟会の参加を機に庭園改善運動へと広げる積極的な活動を起こしていたのであった。

次に、この田村剛の言動に対して辛辣な批判を投げかけた上原敬二(1889～1981)に注目しておきたい。

まず大正7年に田村の『造園概論』が出版された翌年に上原は著書『住宅と庭園の設計』を出版して、その中で以下のような時代認識を表明した。



上原敬二 (1889～1981)

近来個人生活の問題が深刻に考えられて来た時世には住宅にも色々な近代建築が応用され、海外からは新しい設計意匠に参考となる住宅研究の書物が盛んに輸入されて来た。庭園の方も常によく考えて、之と相応する様に造り出さなければならぬ。何時でも息を切って建築の進歩の後を追いかけて居る有様では何の余裕もなく、到底良い考案は浮かびそうにも見えない。時には一思いに建築の進歩を待ち受ける位の発奮が欲しいと思う。13)

この上原敬二の文章によると、海外からの新しい設計意匠に影響された我が国の建築の進歩に合わせて、我が国の庭園も新しい進歩が必要である、とする当時の認識が見受けられる。このような上原の時代認識は、既に見てきたように田村が『造園概論』で表明していた現代の造園様式の必要性和通じ合うところが多々あると理解される。つまり大正7～8年頃における上原と田村は共に新たな庭園様式の必要を実感しており、両者に大きな差は無かったと思われる。

ところがこの後、田村が大正8年『実用主義の庭園』を出版し造園界のモダニズム宣言のような言説を表明し、さらに大正9年からの生活改善同盟会における庭園改善をめぐる反響が徐々に大きくなってくると、上原との間に大きな相違が決定的に生じて来たようなのである。

まず上原は大正12年出版の『庭園学概要』14)において、実用主義庭園や生活改善同盟会への明らかな疑念を表明した上に、翌13年出版の『造園学汎論』では以下のような実用主義庭園に向けた過激で辛辣な批判を書き綴ったのである。

実用主義なるものがここ数年来唱導されて来た。・・・それは宛も建築界に於けるセセッションイズムとか、絵画界に於けるキュヴィズムの関係と同じで一派の説であって之が造園全体を支配して居るものではない。・・・之が我邦に果たして適当かどうかは大なる疑問である。・・・実用主義の直線式庭園は、無味乾燥にして趣味に乏しい・・・実用主義者の頭脳には人間の精神的利用と伴う半面が理解されて居ない。・・・実用主義の庭園に美を求めようと説く人を造園技術者の内から出したいくない、実用主義の庭園をして国民芸術の一つたらしめようと唱える人を造園界から駆逐したい。15)

(第二編 個人庭園／第五章 所謂実用主義の庭園)

上原敬二は確かに個人名を明記していないが、批判の対象である「実用主義者」なり「実用主義の庭園をして国民芸術の一つたらしめようと唱える人」とは、明らかに田村剛を指しているであろう。また上原にとっては、美と用の統合乃至調和を歴史的に追求してきた日本庭園の奥深い表現様式・伝統技術と比較して、欧米受容の実用主義庭園は何の味わいも無く陳腐なものにしか過ぎないのである。さらに上原は、続く「第六章 庭園改善の運動」で次のような言及を行った。

我国に於ける庭園改善運動は他の欧米諸国のそれと非常に趣を異にして居る。殊にその動機が生活改善に発足して居る点が著しく目につくのである。この運動は生活改善の必要が論議され、その一つとして住宅改善を叫ぶようになり引き続いて庭園にまで波及したのである。その中心活動は生活改善同盟会に帰する。・・・今、同会が発表した庭園改善意見なるものがあるからそれを忠実に紹介して見たい。・・・庭園改善と一口に称するけれども中々単純には実行出来るものではない。之に趣かんとする時代思潮とか時代傾向とか云うものが社会を導くようにならなければ効果は挙らない。16)

(第二編 個人庭園／第六章 庭園改善の運動)

ここから、新時代に合致した日本庭園の進歩を実感していた上原にとって何らかの庭園改善は認めねばならないものの、されど実用主義庭園だけは論外であった。換言すれば、田村のように機能主義デザインによる実用主義庭園によって時勢に沿った庭園改善を進めようとする主張に、上原はどうしても納得できなかったのである。従って上原は、日本庭園の進歩や庭園改善を受け入れながらも実用主義庭園を認めず、ゆえに田村に批判を向けなければならなかったのである。

結局のところ、田村剛と上原敬二の両者における根本的な相違とは、造園における「美(芸術)」と「用(実用)」の相関性に対する認識の違いなのであり、またモダニズムという時代性あるいは機能主義デザイン、伝統と革新などの根本的な洞察の違いだったと考えられる。17)

表-3) 昭和戦中期における<戦争と造園>をめぐる言説 (主に日本庭園協会誌から)

昭和	記 事	掲 載 誌
14(1939)	本号表題「国民精神總動員」 岡崎 文彬「時局と庭園」	庭園と風光 第21巻第9号 造園研究 第29号
15(1940)	西田富三郎「時局と建築と造園」 龍居松之助『庭園と日本精神』	庭園と風光 第22巻7号 文部省教学局編纂
16(1941)	小寺 駿吉「時局下造園界の諸問題」 堀口 捨巳「日本庭園の伝統と国民住宅」 田村 剛「国民庭園の提唱」 斎藤 勝雄「共栄園と日本住宅庭園」	造園研究 第36号 庭園と風光 第23巻第3号 庭園と風光 第23巻第3号 庭園と風光 第23巻第8号
17(1942)	田村 剛「東亜共栄圏と庭園家の覚悟」 本郷 高郷「大東亜共栄圏と神社」 中島卯三郎「決戦態勢下の造園問題」 上原 敬二『日本人の生活と庭園』 大政翼賛会文化部編『新生活と住まひ方』	庭園 第24巻第1号 庭園 第24巻第2号 庭園 第24巻第9号 三省堂 翼賛図書刊行会
18(1943)	時局と庭園座談会(1) 時局と庭園座談会(2) 関口兒玉之輔「戦争と庭園」 (本号表題「国民庭園及園芸の研究」) 田村 剛「国民庭園試案」	庭園 第25巻第1号 庭園 第25巻第1号 庭園 第25巻第3号 庭園 第25巻第4号
19(1944)	日本庭園協会誌『庭園』休刊	

5. 昭和戦中期におけるナショナリズムと国民庭園 -戦争と造園をめぐる-

大正期を通じた田村剛による「実用主義庭園」から「庭園改善運動」に到る一連の展開に見られた機能主義的なモダンデザイン思考が、その後の昭和初期の戦争時代に突入してから如何なる状況へと変質していくのかを、以下に敢えて素描ながらも取り上げておきたいと考える。

「大正ロマン」とも呼ばれ、前衛的で自由闊達な芸術文化が数多く誕生した大正時代とは全く異なり、「昭和恐慌」と呼ばれる世界経済の行き詰まりを発端として、昭和6年の満州事変から続く昭和12年の日中戦争へ到って緊迫した時勢は刻々と深まるとともに、国家総動員法(昭13)や国民徴兵令(昭14)、大政翼賛会発足(15)などは一般国民を徐々に「ナショナリズム」による戦時体制へ組み込んでいった。さらに昭和16年の対米英開戦による太平洋戦争への突入は国民生活の戦時統制をいっそう強行させ、全ての国民は「戦争参加・協力」を余儀なくされた。

このようなナショナリズム時勢での「戦争と造園」をめぐる多様な言説を取り纏めたのが上掲の表-3)であり、これを見ると当時の日本造園界を代表する人物を殆ど確認することができるのである¹⁸⁾。これらの言説全てに共通するのは、<戦時下における造園の役割とは何か>という視座であり、例えば岡崎文彬や小寺駿吉などは海外での事例紹介を通して造園家の役割を論及している。また堀口捨巳が、建築家による「国民住宅」設計に対応した「国民庭園」を庭園家に検討してほしいと要望すると同時に、田村剛は「国民庭園」の提唱を論じたのであった。

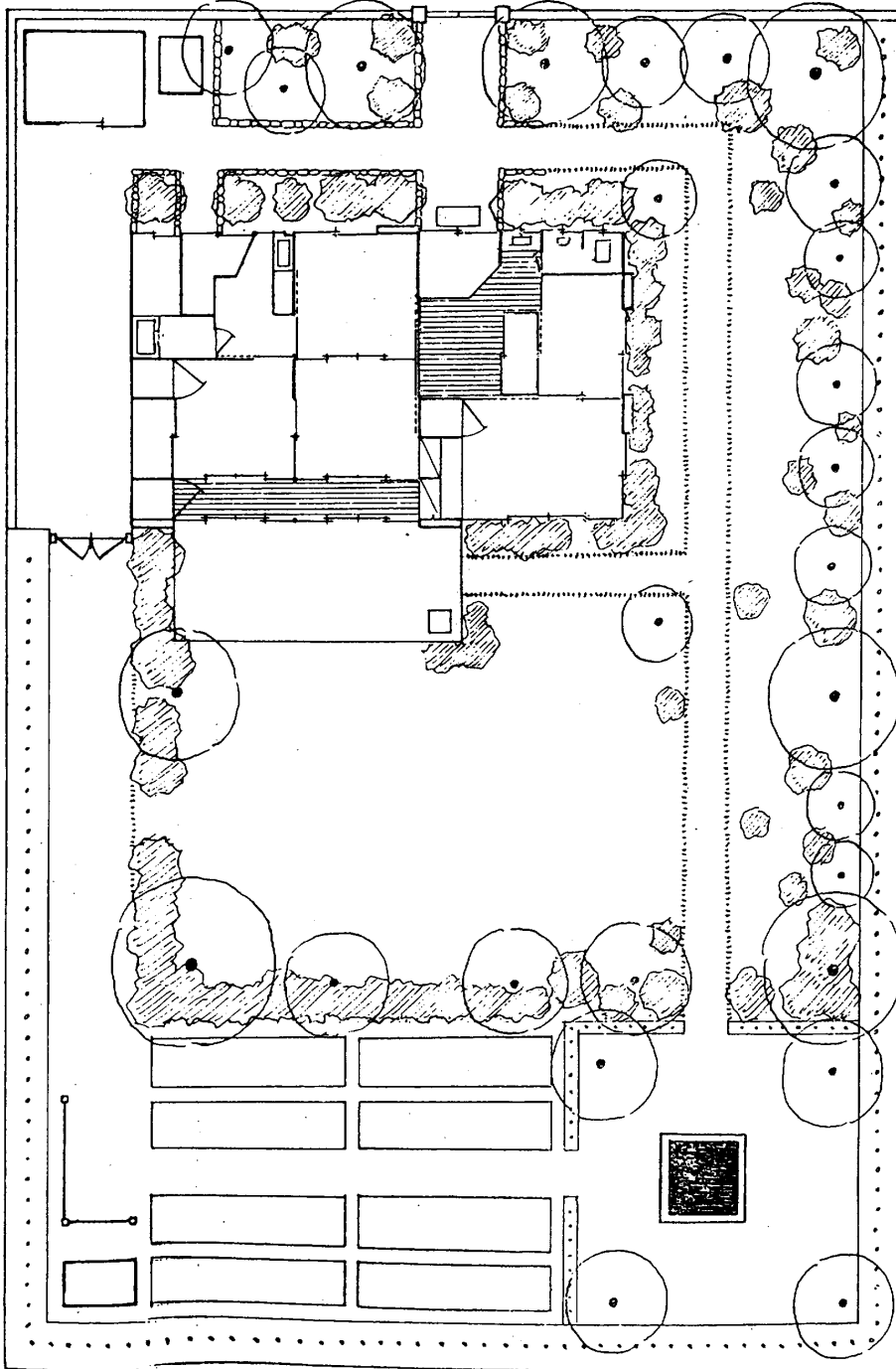
昭和16年発表の田村による論考「国民庭園の提唱」によれば、「現下の時局は戸外に於ける身體の鍛錬などが痛切に要求せられ、又食糧生産のために一坪の空地でも利用したいといった社会情勢であるから、なるべく実用的な近代庭園とする」ことが戦局で最重要であると主張し、続く昭和18年には次頁の「図-9)国民庭園試案」を公表したのである。かかる田村の言説や設計案から明らかなように、戦時下で提唱された国民庭園とは、大正期以来の実用主義庭園や庭園改善運動に見られた機能主義デザインが変質したものであることを認めねばならないのである。

図-9) 国民庭園試案

田村 剛

住宅—— 八〇㎡
敷地—— 二〇〇㎡
公道北側

- 一、住宅の配置——住宅の配置は庭園計画の基本的な地割を決定するので、慎重に検討する必要がある。建物は公道より四・五mだけ後退せしめ勝手廻の路地は二・五mの幅をとり東側に五mの余裕を残して狭いけれども路地庭とする。従って主庭と後庭とは一八㎡の奥行となる。
- 二、庭園の地割——主庭と後庭とを南北に重ねる。これはかうした敷地の場合最も合理的な、そして普遍的に行はれてある地割の型式である。そして前庭と東西の路地とをとして後庭の中央を東西に兩断する苑路とで敷地を一周するこの出来るやうに苑路を設定した。
- 三、前庭——門から玄關へは一直線に玄關道路を通した。玄關が扉式になつてをれば、この場合一層好都合である。これに直交して十字路を穿ち、左右の植樹帯には建物側にはヒラギナンテン等耐蔭性の灌木を、外側にはシビ、モチ、ツバキ等の喬木を植ゑる。その下木としてはヤツデ、アヲキ、アセビ等を、下草としてはシダ、クマザサ、キチジヤウ等を採用する。前庭の境には生垣はもたないで、低い塀又は垣根とする。西北の隅には物置と防火用器一式の置場とを造る。
- 四、路地——西側勝手廻の路地は日當りが悪くじめくするから、なるべく鋪裝して置く、そして外側には腐葉場、洗濯場、石炭置場等を設けるだけの餘地はある。東側の路地庭は前庭に準じた植栽を行ひ、多少落葉物又は花木等を混植するもよい地被類はやはり耐蔭性のものを選ぶ方が安全である。
- 五、主庭——縁側から出入するために露壇を設けるこゝは春から秋にかけては戸外の食堂となり應接間となり又休憩所ともなる。鋪石したい所である。



が經費の都合では、縁石だけ煉瓦か切石かを用ひる。後庭と西の路地との見切りにはツツジ、アセビ、アザサキ等の灌木の栽とし、一・五m位に刈込むのである。喬木としては縁庭用としてはケヤキを鑑費用としては家人の好みにより選擇する。常緑闊葉樹も交えたい。主庭は正味一五〇㎡あるのだから芝を張ることにする。

六、後庭——後庭は三區分して、東の隅には防火用の貯水池を中心として子供の領分とする。金魚を放つのもよい。四隅には果木を植ゑる。但し子供のいない家庭では花畑とし、老人だけの家庭では主庭の一部分をとり入れて茶室と茶庭とにし、
もよい。
後庭の中央部は約六〇㎡の茶園である。自給自足といふ課には行かぬが随分助かる筈である。西の端には肥料溜と物干とを設ける。敷地の三方はサハラ、マキ又はウバメガシで幅一m高さ二m位の生垣を仕立てる。
七、經費——一時に立派なものを造るとすれば、これでも二、〇〇〇圓もかゝるであらう。庭木は小さなものを採用するとなれば一、二〇〇圓位でも造れないことはあるまい。芝なども目地を荒くして一年位もまつつもりであれば、經費は半分位でもすむ。生垣などは家人の手で出来ないこともあるまい

6. おわりに—今後の課題：近代日本造園史におけるモダニズムとは—

以上のような考察から、大正・昭和戦中期の田村剛による一般住宅庭園をめぐる一連の活動を具体的に取り上げ、近代日本造園史におけるモダニズムからナショナリズムへの歴史的な一評価を試みた。田村の著書『造園概論』に「モダニズムの萌芽」を読み取り、続く『実用主義の庭園』では欧米の新傾向に影響を受けた機能主義的なモダンデザイン思考を見出すとともに、造園界の「モダニズム宣言」の意義を指摘した。そして生活改善同盟会を通じた「庭園改善運動」に展開し、さらに昭和戦中期に到って「国民庭園」へと変遷する一連の事態を検証したのである。

今後はさらに、近代日本造園史における美と用の相関性や伝統・和風・機能・デザインの概念、戦時下の問題などをめぐって、モダニズムの歴史的課題を多角的に究明する必要があると考える。

註

1) 本稿は、以下の拙稿にその後の新たな見知を入れてまとめ直したものである。

拙稿①「日本近代造園史における庭園改善の意義」平成12年度日本造園学会関西支部大会研究発表要旨

拙稿②「大正期における田村剛のモダンデザイン思考と庭園改善運動」ランドスケープ研究64-5, 2001

拙稿③「田村剛の受容した欧米の実用主義庭園」平成13年度日本造園学会関西支部大会研究発表要旨

拙稿④「田村剛の庭園改善運動に対する上原敬二の批判」平成15年度日本造園学会関西支部大会研究発表要旨

拙稿⑤「田村剛の実用主義庭園と庭園改善運動」平成15年度日本造園学会関西大会研究発表資料集

それぞれの発表時においてご教示やご助言をくださった研究者の方々に改めて深謝申し上げたい。

なお管見による以下の先行研究が主に参照された。

石川 格(1978)：近代日本における庭園の風潮：『庭園学概論』誠文堂新光社, p118-121

飛田範夫(1985)：大正時代の造園：『作庭記からみた造園』(SD選書)鹿島出版, p39-42

上原敬二(1987)：日本における洋風：『庭園入門講座10』加島書店, p96-99

西村公宏(1989)：大正末期から昭和初期にかけての住宅競技設計における実用庭園：造園雑誌52(5), p19-24

鈴木誠(1998)：庭園のデザイン系譜：『ランドスケープ体系 第3巻』岐報堂出版 p47-52

近田哲也(1999)：大正・昭和戦前期における住宅庭園の近代化に関する研究：日本建築学会大会学術講演梗概集

2) 田村剛(1918)『造園概論』成美堂, p208-209

3) 上掲書, p201

4, 5) 田村剛(1919)『実用主義の庭園』成美堂, p3

6) 上掲書, p1

7) 村松貞次郎(1977)『日本近代建築の歴史』NHK, 藤森照信(1993)『日本の近代建築』岩波新書

8) 文化住宅とは、近代的な椅子式生活による居間中心型の一般住宅を指しており、大都市の中流層から始まって一般国民へ急速に広まった。

9) 生活改善同盟会に関する主な参考文献。

中島邦(1974)：大正期における生活改善同盟会：史艸15号

磯野さとみ(1991)：生活改善同盟会に関する一考察：昭和女子大学学苑621号

内田青蔵(1992)『日本の近代住宅』鹿島出版

10)『建築雑誌』402号 p67, 大正9年6月

11) 生活改善同盟会誌『生活改善』5号, p1-16, 大正11年8月

12) 大正7年8月に発足した日本庭園協会は、庭園・公園・園芸及び風景に関する学際的研究や普及活動などを主目的とするとともに、「型にはまった旧思想を一擲し、時代に適応した新しい思想に宿った造園というもの」を普及したい」という設立主旨から、造園界の進展と改革を目指して結成された文化団体であり、造園家だけでなく幅広い知識人や芸術家などが参加して広範な活動を展開させた。

13) 上原敬二(1919)『住宅と庭園の設計』高山房 p22

14) 上原敬二(1923)『庭園学概要』紀元社, p2-9

15) 上原敬二(1924)『造園学汎論』林泉社, p203-206

16) 上掲書, p208-225

17) 大正期における田村剛と上原敬二の間には、実用主義庭園をめぐる論争とともに、自然風景の保護と利用(後の国立公園制度)をめぐる論争もあり、両者の相違を考察することは近代日本造園史におけるモダニズムの課題を究明するに際して重要な論点の一つであると考えられる。

18) 「戦争と造園」については、改めて大きく取り上げて詳しく論及したいと考えている。

(平成15年12月5日受理)